

## 「洗バプテスマ礼を始まりとして」（ローマ9章1-8節）

### 1 洗バプテスマ礼、キリスト者、教会

ローマの信徒への手紙第9章は洗バプテスマ礼について語っています。以前使われていた口語訳聖書では洗礼はバプテスマと訳されていましたが、いまの聖書ではそれは括弧に入れてあります。

ただ洗礼の意味はバプテスマというもとの言葉にさかのぼって考えれば理解しやすいと思います。

バプテスマという言葉は、水に浸す、つける、沈める、あるいは沐浴するという意味の動詞から派生した言葉（用語）です。したがって教会でおこなわれる洗バプテスマ礼というのは、人が水に沈められそこから引き上げられるという、人の生まれ変わり（あるいは再生）を象徴するもので、信者として教会に加入するため必要なものとされている儀式です。カトリックの古い教会に行くと洗バプテスマ礼の設備が教会の入り口付近にあることがあります。洗バプテスマ礼によって教会に加わる、つまり入会、信者の生活の始まりの儀式という位置づけです。

バプテスマの方法、洗礼の方法は、最初期の教会では、文字通り全身を水に浸す浸礼というやり方でした。頭やひたいに水をたらす滴礼もかなり早くから行われていたようです。そのほかにも洗バプテスマ礼の方法はあります。バプテスト教会は原則として浸礼です。また親の信仰にもとづいて幼児に洗バプテスマ礼をほどこすことはせず「信仰者のバプテスマ」という立場をとっています。浸礼はバプテスト派だけではありません。ロシア正教、ギリシヤ正教などのオードクス教会もともと浸礼ですし、いまも子どもに対しておこなわれていると聞いています。またアメリカの大きな教派の一つであるデイサイブルズ派も基本的に浸礼です。私どもの教会も元来浸礼でしたが、いまは滴礼となっています。

洗バプテスマ礼の方法は違っても教会は今日まで洗バプテスマ礼を大切にしてきました。それは復活の主イエスの大伝道命令の中に洗バプテスマ礼があったからです。イエス・キリストは甦り、四十日のあいだ弟子たちに自分が復活したことを示し、全世界に出て行って福音を宣べ伝えるように命じられます。その中で、「すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗バプテスマ礼を受け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」（マタイ28・19）と仰っています。信者となった徴として神の名によって洗バプテスマ礼を授けるように命じています。ですから教会はカトリックもプロテスタントもイエスのこの命令に忠実に従ってきたわけです。

ところで洗バプテスマ礼を授けるのは教団とか教区とかではなくてそれぞれの教会です。それぞれの教会を個別教会とか各個教会という言い方をしますが、各個教会で洗バプテスマ礼はおこなわれます。説教や聖餐はそのほかのところでもなされます。しかし洗バプテスマ礼はおこなわれない、つまり伝道し洗バプテスマ礼を授けることが個別教会の特別の使命です。その意味では各教会で大切にされてきました。

教会入会の儀式として洗バプテスマ礼バプテスマという儀式がおこなわれたのはなぜか、それは分かりません。というのも洗バプテスマ礼バプテスマは必ずしも教会がやり出したものではないからです。福音書のはじめのほうに、どの福音書にも、イエスの宣教に先立って、バプテスマのヨハネという人物が現れ、洗礼活動していたことが伝えられています。洗バプテスマ礼バプテスマというのはユダヤ教の中ですので何らかの形でおこなわれていたわけです。それがキリスト教の中で発展し定着していきます。発展していくに当たっては、決定的なこととして、主イエス・キリストも洗バプテスマ礼バプテスマをお受けになったということがあったと言わなければなりません。イエスも洗バプテスマ礼バプテスマを受けられた。それがあつた。もしそうであるならどうして私どももこのイエスにならつて洗バプテスマ礼バプテスマを受け主に従う道を歩むことがなされなくてよいだろうか、イエスを主とするキリスト者はそう考えます。洗バプテスマ礼バプテスマは教会にとつてだけでなく私ども信仰者一人一人にとつても重要な意味をもっているのです。キリスト者の生活の始まりは洗バプテスマ礼バプテスマにあります。

## 2 キリストと結ばれる

洗バプテスマ礼バプテスマの意味をローマの信徒への手紙第9章は詳しく説いています。そういう箇所は新約にはほかにありません。

著者パウロがここで洗バプテスマ礼バプテスマのことを語り出した前後関係はこうです。この手紙の最初から彼が語ってきたのは、人が救われるのはただ信仰による、行いではないということです。信仰による義、信仰による救いです。それこそが私どもにとつて、私ども罪人にとつての福音です。

しかしこの福音には、義とされて生きる、神に受け入れられそれに感謝し、神とともに仕えるということも入っています。キリストによつてもたらされた救いは観念的なものではない、現実に救いにあずかつて生きるということです。イエス・キリストを救い主として信じるだけでない、この主に従って行くということもなければならぬのです。こうした生きることについて、その幸い、喜び、希望と力について彼はここから、つまりこの第9章から語り始めるのです。信じて生きることは洗バプテスマ礼バプテスマから始まるということです。パウロは洗バプテスマ礼バプテスマから語りはじめて信仰生活全体を語ろうとしていたということです。信仰の生活は洗バプテスマ礼バプテスマから始まる、このことがはっきりしなくなると信仰の生活もたしかなるものでなくなるということです。それゆえパウロは次のような問いかけから始めています。

では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか。決してそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができるでしょう。それともあなたがたは知らないのですか(1-3)。

それともあなたがたは知らないのですか？ むろん知らないはずはない。洗バプテスマ礼バプテスマを受けたいことはどういうことか、すでに知っていることをローマの信徒は思い起こさなければならぬ。私どもも思い起こさなければならぬのです。

キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために**洗礼**を受けたことを。わたしたちは**洗礼**によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです (3-4)。

「キリスト・イエスに結ばれるために」とあります。そこへ向けて私どもは**洗礼**を受けたと書いてあります。口語訳聖書では「キリスト・イエスにあずかるため」となっています。

キリストに「結ばれる」「あずかる」、これは少しばかり意識です。直訳は、キリスト・イエスへと**洗礼**された、です。先ほど引用したマタイ28章19節のイエスの伝道命令の中の一句、「父と子と聖霊の名によって**洗礼**を授け」も、「父と子と聖霊の名へと」、ないし「名の中に」です。キリスト・イエスと**洗礼**を受けた者とは一体とされます。イエス・キリストの死は私どもの死となり、イエス・キリストの甦りは私どもの甦りとなります。「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます」(8)。ただの生まれ変わりではありません。**洗礼**によってキリストの命を生きることが私どもに許されるのです。「古い自分」に死んで「新しい命」に生きるのです。

「キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです」(10)。罪に対してのただ一度の死は決定的なただ一度の死です(ヘブライ1・2)。このキリストの死はすべての人の死に関わり、すべての人の死を意味づけます。**洗礼**は一度だけです。私どもは**洗礼**と共にイエス・キリストに結びついて決定的に死んだのです。私どもの過去がどのようなものであっても、それが私どもをいま支配することはない。**洗礼**によってイエス・キリストにより私は受け入れられた。そこに今までは違う生が与えられたということです。**洗礼**は古い自分に決別したことを、古い自分に断絶したことを、古い自分が死んだことを語ります。**洗礼**はこの事実に立ってそれにふさわしく歩めと命じ、励まし、また私どもに望みを約束します。水による**洗礼**と共に私どもには聖霊が与えられます。御霊による人生の歩み、それが私どもの歩みとなります。

### 3 洗礼から生きる

**洗礼**を受けたということは私どもがイエス・キリストにしっかり結びつけられたという事です。

しかしそれは私どものほうでイエス・キリストにつかまっていなければならない、がみついていなければならないというのでしょうか。そうではありません。イエス・キリストが私どもをつかまえてくださった、つかまえたまままでいてくださる、そのしるしが**洗礼**にほかなりません。

一時の感激で洗バプテスマ礼を受けても、それが醒めてしまい、教会からも、信仰からも離れてしまうということがとき起こります。私は高校三年のとき洗バプテスマ礼を受けましたが、まっすぐここまで来たわけではありません。私どもはしばしば神を見失います。神は厳としてそこにおられるのに、そこにおられる神に祈る、その神を見いだし信頼する、この神に希望するというような気持ちを失いがちになります。ちよつとしたことがつまずきとなって疑いの中に沈み込み、不安の中で長い時を過ごすことになります。神にとってそれは、いわば織り込み済みかも知れませんが・・・。

そのような私どもにとって洗バプテスマ礼に関する次のようなルターの言葉はとても慰めになるのではないでしょうか。「だから大胆に、自由に、洗礼に信頼し、すべての罪や良心の恐れにさからって洗礼を守り、私はきよい業を一つもしていないことを知っている。しかし私は洗礼を受けている。そのことによつて、いつわりたもうことのない神は私に対して、私の罪を私に帰さず、罪を殺し、絶滅することとし給うとしている」と謙遜に言わなければならぬ」（邦訳著作集第一巻、620頁）。

簡単にいえば「洗礼に信頼」せよ、ということですが、ここにあるようにルターは「しかし私は洗礼を受けている」と自分に言い聞かせて、試練を乗り越えていった。洗バプテスマ礼は客観的なことです。洗バプテスマ礼を受けているというこの事実が、あなたを、どのような時も、どのような所でも、あなたを守るということです。主イエスがあなたをとらえています。あなたがイエスをとらえているわけではありません。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネ 15・16）。これが洗バプテスマ礼の意味です。イエス・キリストの救いは決して取り去られることはない。私どもはまことに弱い、もろい、壊れやすい存在です。しかしその中でこそ、洗バプテスマ礼という事実が、たしかなしるしとなつて私どもを支えます。

もう一つ、付け加えておきたいことは、この洗バプテスマ礼、水による洗バプテスマ礼は出発点だということです。ゴールではありません。それはキリスト教生活の始まりです。キリスト教生活とは信仰と希望と愛に生きつつ神の国を証しする生活のことです。その生活の基準は「主の祈り」に示されています。主の祈りをもって神に呼びかけて歩む生活、それが洗バプテスマ礼から始まるキリスト教生活です。

こうして開始されるキリスト教生活は息の長いものです。この生活は目的地までつづく一本の鉄道線路にもたとえられると思います。いくつかの駅があります。それに立ち寄りながら目的地に向かいます。途中いろいろな人が乗り込んできます。まるで宮沢賢治の銀河鉄道みたいな。途中の駅は、私どもにおいては、聖晚餐といつてもよいでしょう。旅路の糧は、パンとぶどう酒による聖晚餐です。その時々洗バプテスマ礼において一回的に示された十字架の恵みが振り返られ、かつ来るべき神の国のへ望みが固くされます。それはこの地上の信仰の旅路を豊かに養ってくれます。洗バプテスマ礼から始まり、聖晚餐に養われて、私どもは地上の旅路をつづけていくのです。

(2018年7月8日)